＜巻頭言＞

変革する力：力量あるソーシャルワーカーへの途

社会的価値を高めるために

未来を信じてきた時代が終わろうとしている。ホモサピエンスつまり知恵のあるヒトである人間は、社会が目指すべき目標を見失い、未来の社会を構想する想像力も使い果してしまったかの如くである。しかし、現在の時代閉塞状況を人間が創り出した以上、そこから脱出する道筋も、人間が創り出せるはずである。

日本社会事業大学は第二次大戦直後の時代閉塞状況のもとで、「悲しみ」を「幸せ」に変えることを使命として設立されている。第二次大戦直後の時代閉塞状況は、「黄金の 30 年」と呼ばれる経済成長と、それを基盤にした「所得再分配国家」としての福祉国家によって打開されたといってよい。しかし、高度成長の終焉とともに、「所得再分配国家」として福祉国家も行き詰ってしまったのである。

現在の時代閉塞状況の背後には、こうした現金給付に依存した「所得再分配国家」の行き詰まりがある。この時代閉塞状況の迷宮から脱け出すアリアドネの糸玉の役割を果す使命は、ソーシャルワーカーが担っている。というのも、現金給付に依存した「所得再分配国家」から、現物給付へとシフトする「社会サービス国家」あるいは「社会投資国家」への道案内はソーシャルワーカーが果さなければならないからである。

それだからこそ、日本社会事業大学の社会福祉研究大会の大会テーマを、「変革する力：力量あるソーシャルワーカーへの途」に設定してきたといってよい。『社会事業研究』の本号で取り上げる第 56 回大会は、「変革する力：力量あるソーシャルワーカーへの途」という統一大会テーマの３年度目として、「社会的価値を高めるために」をサブタイトルに掲げている。

しかも、今大会はこの統一大会テーマのもとでの最後の大会となる。そこでこの統一大会テーマの締め括りとして、今大会では災害ソーシャルワークをサブタイトルに取り上げている。というのも、日本社会事業大学は戦災という人為的災禍の「悲しみ」を「幸せ」に変えることを使命として誕生したけれども、現在では自然災害という非人為的災禍の「悲しみ」を「幸せ」に変えることが重要な使命となっているからである。しかも、こうした非人為的災禍がソーシャルワーカーの使命が飛躍的に拡大する「社会サービス国家」あるいは「社会投資国家」への転換期に生じていることを忘れてはならない。

というよりも、大災害は本質を焙り出す。生命主義、共生主義、参加主義という転換期に追求しなければならない方向性を浮き彫りにし、ソーシャルワーカーの果すべき役割と、実現すべき使命をも明確にしていく。

そこで今大会の、第一日目には、未だに東日本大震災の惨禍に喘ぐ福島県の櫻井泰典部長に、「震災後６年の福島の現状からソーシャルワーカーに期待すること」というテーマで、特別講演をお願いした。その講演を受けて、私が「「悲しみ」を「幸せ」に変えるためにソーシャルワーカーへ期待する事～戦災復興や震災復興を展望しながら～」記念講演を行った。その上で、櫻井部長と私とで意見交換をする小さなシンポジウムを設けた。

第二日目には「「我が事･丸ごと」地域共生社会実現とソーシャルワーカーに期待される役割」をテーマに設定し、座長を本学通信教育科の佐竹要平講師に、シンポジストとして厚生労働省の添田正揮社会福祉専門官、文教学院大学の中島修准教授、川崎市健康福祉局総務部企画課の竹田幹雄氏に参加していただき、シンポジウムを開催した。

さらに第二日の午後には自主企画分科会が催された。私は本学学生の使命感の高さに、ただただ心を動かされるばかりであった。

二日間にわたる今大会の参加者は 658 名を数えた。在学生、卒業生、教職員、一般参加者が一同に集い、学び合う実り豊かな大会として幕を閉じることができた。

来年度以降も今大会の成果を継承しながら、未来に向かって大きく羽撃き、日本社会事業大学の研究教育を開花させていく社会福祉研究大会を実現していきたい。

2018 年 1 月

日本社会事業大学社会福祉学会会長
日本社会事業大学学長
神　野　直　彦